

難波西鶴と 海の道

【14】

森田 雅也

北海道下り、南に下がる。西回り航路の東北における一大集散地「酒田」があります。

山形の酒田港は、海の道は大坂へ通じます。最上川舟運の拠点でもありました。江戸時代の最上川と言え、『奥の細道』の「五月雨を集めて早し最上川」の名句を思い浮かべます。

松尾芭蕉は元禄2年

6月10日〜15日鶴岡、18日〜25日酒田に逗留しています。

元禄2年と言え、それまで西鶴が猛烈な勢いで浮世草子を世に出版し続けたにもかかわらず、この年の後半から同4年まで、浮世草子の執筆を断っていた、謎の時期です。病気が、目の病、結核等、現段階ではいずれの説も決め手に欠きます。

再び、芭蕉と最上川

2人のかかわりとは

についてですが、『奥の細道』では「最上川は、みどりのくより出て、山形を水上とす。こてん・はやぶさなど云おそろしき難所有り。板敷山の北を流れて、果ては酒田の海に入る」と描写しています。

芭蕉は江戸深川を旅立って以来、松島、平泉と太平洋側から日本海側の象潟を目指して慌ただしい東北の旅を強行しますが、「蚤虱馬の尿する枕もと」と詠んだ「尿前」を過ぎ、「尾花沢」に入る

と、びたつと足が止まります。腰を据えたと書いてもいいでしょう。

芭蕉が5月17日〜27日もの長逗留をした理由から、清風は巨額の富

を得ていました。前回、書いたように清風は商人として往来手形を持っていましたから、日本全国どこへでも船に乗って行くことができず。

事実、清風は尾花沢から最上川を下り、酒田に出て、江戸や京坂まで往来し、多くの俳人と交わりました。はじめは談林派だったのですが、のちに芭蕉に学び、蕉門となります。

芭蕉を家にとめて盛大に歓待したのは師匠だから当然だったわけですが、でも初めは西鶴と同門の談林派であったことには注目できず。次回に続きます。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

同時代に生きてた芭蕉と西鶴